

# メビウス切断

ながのとしお

笑いの中にこそ、自分のあり方を変える  
可能性が隠されている。

カルロス・カスタネダ

1

青白い街路灯に照らされ、中途半端に暗い夜の住宅街を、四方滅郎はしかためつさうやや覚束ない足取りでゆっくりと歩いていた。家へと向かう道は他に人影もなく、一人歩く滅郎に梅雨時のじめじめした空気がまわりついてくる。

滅郎は月曜だというのに少し酒を飲みすぎていた。

彼はどちらかといえば酒が好きな方だが、仕事の付き合いいで飲むことは殆どなかったし、飲むにしてもそういう席では自然とほどほどということなる。まして週の初めから足取りが覚束なくなるほど飲むなどということは、

(1)

普段の彼なら考えられないことだった。

前の日に恋人の生子しよことつまらぬ喧嘩をしたのも理由の一つだろう。そしてその晩は飲んだ相手もその場の話題も悪かった。

その日、終業間際になつて技術本部長のスズキに声をかけられた。飲みに行こうと誘われたのだ。楽しい話ではないなと思つた。もちろん断ることもできた。だが、生子との喧嘩のことも手伝つて、滅郎はその誘いについて乗ってしまった。

「滅郎、今日はちよつと飲もうじゃないか」スズキの屈託のない誘いの言葉が、駅からの道を歩く滅郎の頭の中に木霊した。

予想通り、スズキの話は楽しいものではなかつた。お前もこの会社で十五年もやってきたんだし、そろそろもう少し責任のある地位に就いたらどうだ、せめて課長ぐらいやってみるよという、今までにも何度か繰り返されてきた話だ。

滅郎には管理職に就く気はない。プロジェクトリーダーをかけもちしている今でさえ管理的な業務の多さにうんざりしている。ここでそんな役職を引き受けたら、自分がやりたいプログラムを書くという仕事はさらに遠く手の届かないところへ行つてしまふだろう。滅郎にとつてコンピュータに向かいプログラムを組むことは他の何にも代えがたいものだった。彼は技術者として生涯一プログラマーでいたかつたのだ。

滅郎の勤める亀戸数理科学研究所は、大学時代にスズキが別の大学の仲間と起こしたコンピュータソフトの会社である。スズキと同級だった滅郎も誘われて学生時代からそこでアルバイトをしていた。大企業に就職する嘘くさを嫌い、居心地の決して悪くないその会社にそのまま勤めて、気がつくともう十五年の歳月が流れていた。

スズキは今でこそ取締役という立場で経営者の視点からものを見ているが、もともとは理系の人間である。同じ情報工学科の滅郎をこの会社に誘ったくらいだから、滅郎の生涯一プログラマーでいたいというナイーブな気持ちもある程度は理解している。だが、最近になって増えてきた大きめのプロジェクトをスムーズに進めていくためには、せめて滅郎に課長のポジションを引き受けてほしい……。滅郎の技術力を買っているからこそスズキの願いだっただ。今までにも何度か切り出しては滅郎に軽くあしらわれていた話題だったが、十五年という一つの区切りを持ち出して、その晩スズキはいつになく熱心に滅郎を口説いたのである。

とはいえ、管理職にはならないという滅郎の気持ちは確固としたもので、スズキの説得程度で揺らぐようなものではなかった。そこどころが分らないスズキが、繰り返しつくく勧めてくるので、滅郎ははつきり言ったのだ。管理職にならないという自分の立場が尊重されないのなら俺は会社をやめるだろう、と。

そこまで言われるとスズキもそれ以上説得を続けるわけにはいなくななり、トーンを落とすところ言った。

「そうか、分った。お前がそうまで言っんならこの話はなかったことにしてくれ。けど、例のプロジェクトのリーダーの件、あっちの方はよろしく頼むぜ」

話題が変わっても滅郎の気持ちの重さは変わらなかった。

「例のプロジェクト、ね……。はつきり言ってそっちも気が進まないんだが、この会社でやってくつもりなら、そのくらいはやらないと仕方がないってことか」

「滅郎、頼むぜ。あの話をきっちりまとめられるのは、うちの会社じゃお前くらいのもんだからさ。この件がうまく行けばポーナスだってドンとはずむし、そのあとはお前にも好きなようにやらせてやるって」

スズキは前にも聞いた覚えのある言葉で滅郎をなだめようとした。悪いやつではないと分っているだけに、空約束で自分を窮屈なところに追いやることになるスズキの言葉に滅郎はげんなりした。

「スズキ、金の話とはかく、好きなようにやらせるっていうお前の空約束には、ほんとに飽き飽きしてるんだ。お前の気持ちはともかく、いつもお前は社長のヤグチの言いなりで、結局俺がこきつかわれることになる、違うか？」

滅郎の言葉でスズキはバツの悪い顔になり、それには答えずジョッキに残ったビールを飲んだ。スズキのその顔を見て滅郎は、参ったなと思いつつ言った。

「まあ、いいさ。お前とも長い付き合いだし、とにかくこっちはこの会社に食わせてもらってるわけだからな。その件は前向きに考えておくよ」

「おつ、さすが滅郎、嬉しいことを言ってくれるね。お前が前向きに考えるって言ったらこれはもう引き受けたも同然だからな。ホントによく頼むぜ。ところで……」

何事にも楽観的なスズキは、滅郎がそのプロジェクトを引き受けたものと思いつつかなりいい気分になり、話は瞬間に酒の席でのバカ話へと移っていった。滅郎の頭にはスズキの話はもはや殆ど入ってこなかった。スズキの声を上の空に聞きながら、滅郎は今度のプロジェクトについてぼんやり考えていた。

そもそも、そのプロジェクトというのが、滅郎にとってはどうも気の進まないものだった。自衛隊からの大がかりな仕事の孫請けで、爆発物のシミュレーションに関する研究プロジェクトなのだという。滅郎には自分が軍事関連の仕事をしている姿がうまく想像できなかった。そんなことにぼんやりと思いを巡らせていると、スズキの言葉が頭に飛び込んできた。

「ところで滅郎、彼女とは最近どうなの？」

彼女 という言葉が滅郎をその場に呼び戻した。

「ああ、生子ね……」

滅郎が昨日の生子との喧嘩を思い出しながら曖昧に頷いていると、スズキは言葉を続けた。

「お前ももう三七だろ。そろそろ身を固めてもいい時期じゃないのか？」

いかにもスズキの言いそうな通俗的な台詞だと滅郎は思った。こいつには世間一般並み以外の考え方はできないのかと、滅郎にはそれが不思議でならなかった。

「どうしてお前はそんなに月並みな考え方しかしないんだろうな？ 男と女がくっつくとかくっつかないとか、そんなのは人それぞれじゃないか。年がどうとか身を固めるとか、俺はそういうのは大嫌いなんだ」

「おい、そんなふうには言わないでくれよ。俺だってお前の考え方は分ってるさ。別に世間並みをお前に押しつけようってわけじゃない。お前のためと思って言ってるんだぜ」

「それはそうかもしれないが、とにかくそういう言い方はやめてくれ。そういう話は誰だっけ自分で考えて自分で決める。そうだろう？」

「そうは言ったって、彼女だって色々気持ちがあるんじゃないのか？」

色々な気持ち……。そう、確かに彼女にも色々な気持ちがあるはずだ。そうして滅郎の想いは昨日の生子とのやりとりへと流れていった。

滅郎は人生は所詮ゲームにすぎないと思っっている。

面白おかしいゲームのことを言っているわけではない。それは実際なかなか深刻なゲームだ。なにしろ人の命が賭かっている。自分の人生を賭けてするゲームなのだ。

だが、ゲームである以上、真剣になりすぎるのはうまくない。つまらないところで熱くなりすぎれば、ゲームを落とすことにもつながる。ほどほどの真面目さで参加

し、ほどほどの楽しみを得る。力を抜けるところでは力を抜いてリラックスし、ここぞというところでは全力投球する。

世間一般で言うような勝ち負けのゲームだと思っっているわけでもない。自分なりに納得のいくフォームで、自分として満足できるプレイをすればいい。そのために重要なのは対象との距離とバランスだ。対象との距離が遠すぎれば十分なプレイができないし、誤って近くなりすぎればバランスを失うことにもなる。自分のバランス感覚がどの程度のものなのか、それは滅郎にも分らなかつたが、とりあえずこれまでのところはそれなりのプレイをしてまずまずのスコアをあげてきた。そんなふうに滅郎は自分の人生を捉えていた。

しかし、このゲームという言葉の意味を説明するのはなかなか難しい。誤解されて否定的に取られることもある。特に女はこの話を嫌うようだった。だから滅郎がこの話を人にすることは滅多になかった。

ところが昨日の晩、生子と飯を食っている席で滅郎はそのことをすっかり口にしてしまったのだ。

その晩いつもの店で夕飯を食っていると、生子は友だちの直子がマルチ商法をやっているしつくく勧めてくるので困っている、あいつもばかなんだから、と愚痴ともつかぬ様子で話してきた。生子はカラッとした性格で、愚痴を言ったり人の悪口を言ったりすることはまずない。自分でなんでも決めていくほうだから、十年ほどのつきあいの中で相談のようなものを受けた記憶も滅郎にはなかった。そんな生子が、マルチ商法のことと困っている、自分としてはそんなものをやる気はないし、けれども長い付き合いのある直子が、何度断っても繰り返し勧めてくるので、どうしたらいいかわからなくて、と言っのだった。

滅郎はそう聞いて答えを求められているのだと思った。

しかし、今考えてみるとそうではなかったのかもれない。生子の中では彼女なりの答えがあって、ただその答えが彼女なりに正しいということ、滅郎に話すことで確認したかっただけだったという気もする。ともあれ、そのとき滅郎は自分なりの考えを生子に説明した。

マルチ商法なんてものは簡単に儲かるものじゃないし、無理な勧誘で人間関係を壊すような話もよく聞く。一応合法的ではあるにしても半分詐欺みたいなもんだ、という滅郎の話を、そのところまでは生子も納得顔で聞いていた。ところがその先で、そもそもマルチ商法のようなバカげたものがこの世に存在すること自体を不愉快に思っている滅郎は、酔いも手伝い、つい調子に乗って言うたしまったのだ。

「俺は人生なんて結局ゲームにすぎないと思うんだよ。自分は自分、他人は他人のルールでやってるわけだね。だからそれぞれのルールでやってるんだってことを、つまり自分は自分のルールでやらせてくれることをさ、そこるところをちゃんと伝えれば、そんなに悩むこともないと思うけどなあ」

滅郎が言葉を切って生子のほづに改めて視線をやると、そこには目を見開き、冷たい視線で滅郎を凝視する彼女の顔があった。しまった、と滅郎は思った。だがもう遅かった。生子がいきなりの剣幕で言葉を投げつけてきた。「いつ誰が悩んでるなんていったのよ。勝手に決めつけてないでくんない？ それにしても、あんたは幸せねえ、そうやって四六時中ゲームの世界を生きてりやいいんだからさ。けどね、あたしや直子はそんなに生きてるわけじゃあないんだよねー。あんたの言い草じゃ、なに？ あたしと付き合うのも、げーむにすぎないと、そーゆーわけ？ まったくご立派な考えじゃない？ あーもー、これ以上あんたのバカな話には付き合ってらんない、あたし帰るわっ」

彼女の強烈な怒りに驚き固まってしまっている滅郎に、一言も口を挟む機会を与えずにそれだけ言うつと、生子は席を立った。ネパール製だという色鮮やかなリユックをつかんで、五千円札を一枚取り出すとテーブルの上にはしんと置く。そして滅郎には見向きもせず颯爽と店を出て行った。

今までも似たようなことは何度かあったが、今回の彼女の爆発は超弩級であった。呆然と見送るしかなかった滅郎は、周りの視線を気にしながら、グラスに残ったビールをごくりと飲んで喉を湿らせた。

滅郎はスズキの話が切れるのを待つて前日の生子とのやりとりを簡単に説明した。それを聞くとスズキは言った。「まったくお前は相変わらずだなあ……。酒が入って調子に乗つてると、相手が出してははずのサインも目に入らずに、神経逆撫でするようなことでも平気で言つちまうんだから……。」

「いやこれでも前よりはいくらか良くなつてはるはずなんだけどな。まあ、酒の入り具合もあるし、こつちにとつて愉快じゃない話題だと、つい度を過すつてことかな」「で、お前はちつとも悪く思つてない?」

「そんなことはないさ。俺だつてそれなりに自分の悪さは感じてゐる。ただ、お互いの考え方とか行動のパターンが噛み合わないときにそういうことが起こるわけだし、こつちがそのパターンをパツと変えられれば一番いいだろうけど、そんなこと、簡単にできるわけもないし、そして、悪いとは思つても、仕方のないものは仕方ないって、どうしても思つちまうんだよな」

「で、その辺のお前の、開き直るような態度が彼女の氣にくわれないんだろう?」

「まあ、それはそうなんだけどさ……。」

スズキの言葉に頷きはしても、どうも自分のほうだけ



が一方向的に要求されているような気がして、滅郎には納得がいけない部分が残る。この手の諍いがあるたびに滅郎は考えてしまう。そもそも彼女なんて存在は俺にとって必要なものなのか。ひとりぼっちの気楽さと寂しさのほうで俺には合ってるんじゃないのかと。

今日のスズキの課長昇進の話もそうだが、滅郎としては自分一人で自由にやりたいのに、気兼ねなくそうできる領域が少しずつ減ってきている。そんな感覚に、このところの滅郎は襲われていた。三七という年齢に対しての社会からの要請、そしてそこからくる鈍く重い圧迫。滅郎は徐々に迫ってくる不自由な息苦しさをそんなふうを意識した。スズキはまだ何かを話し続けていたが、滅郎は上の空で相づちを打つばかりで、話はもう耳に入っていない。こなかった。

自宅への道を歩く滅郎の頭には、そうしたスズキや生子の、顔や言葉が脈絡もなく浮かんでは消えしていた。滅郎はいよいよやをするかのように頭を右へ左へと何度か振って頭を空っぽにしようとした。口から長く息を吐き出し、鼻からゆっくり息を吸うと、鼻腔に湿った重苦しい空気を感じた。梅雨時なのに風が吹くと肌寒いほどの、妙な陽気の晩だった。

自宅のある鉄筋アパートが近づいてくる。玄関前の植え込みにサルスベリの白い花が咲きはじめているのが夜目にもくつきり見えてきた。その木の脇に足を止め細やかな花の様子を見ながら、滅郎はぼんやり思った。母さんの好きなサルスベリ、母さんは元気にしてるだろうか……。

滅郎は酔っぱらった足でゆっくりと、四階までいつものように階段を昇った。自分の部屋の、冴えない焦げ茶に塗られた鉄扉の前に立ち、鍵を差し込み回す。扉を開いて後ろ手に閉め、暗闇の中、明かりのスイッチに手を伸ばした瞬間。

大きめの１LDKの、滅郎の部屋の奥にスポットライトが当たった。

男が三人、奇妙な衣装でアコースティックギターを構え立っている。そしてスパニッシュというのだろうか、三人はてんでんばらばらにギターをかき鳴らすと、真ん中の小男が調子つ外れの大きなだみ声で歌いだした。

「メラーーーーー」

両脇の男二人がそこに合わないコーラスを重ねる。

「たーで」

また小男がだみ声を張り上げる。

「メラー」

そして、また不揃いなコーラスが部屋に響き渡る。

「たーで」「たーで」

滅郎の頭の中は真っ白になっていた。

そのがらんどろとなつた頭の中を、音楽とはとても呼べないギターの騒音と、雄叫びのような歌声が駆け巡り、溢れかえる。その理解を拒絶する光景を眺めているうちに、まず彼らの着ている黒いポンチョが滅郎の意識に入り込んできた。黒地に白の地味な色合いだが、入り組んだ細かい刺繍が目を引き。そして次に三人のかぶっている山が高くつばが広い帽子が滅郎の意識に焦点を結んだ。あれは確かメキシコの……、なんとという帽子だったか……。

滅郎は考えともなく考えていた。

「わあれらはっ」

「メラーツ」「たーでー」

一際高いコーラスが入り、ギターが激しく掻き鳴らされて演奏が終わった。すると、真ん中の小男が声も高らかに滅郎に呼びかけた。

「ようこそ、滅郎くん！ われわれの演奏はお楽しみみただけたかな？」

「ようこそ……？」滅郎は力なくそう呟くのが精一杯だった。

「きみの部屋に勝手に邪魔しておいて、ようこそ、もないもんだね、ハハハハハッ」

男はさもおかしい冗談を言ったとでも言うように体全体で笑った。右に立つ黒メガネの男はニコリともせずじつと立っている。そして左側の中肉中背の男は顔に不思議な笑みをたたえて頷いていた。

そこが自分の部屋であることが意識からすっぱり抜け落ちていた滅郎は、小男の言葉で我に返り、部屋の中を見回した。妙な男たちがいること、その後ろに黒いスクリーンが吊されていること、そして彼らを照らすスポットライトがあることを除けば、確かにここは自分の部屋のようなのだ。しかし、この異常な状況の中、テレビドラマの撮影現場にでも紛れ込んだかのような非現実感を滅郎は感じていた。

「滅郎くん」男が再び馴れ馴れしく呼びかけた。「きみが驚くのも無理はない。だが、これがわれわれの流儀だね。すなわち、予告なく夢のように現れ、任務が終了すれば風のように去る。それがわれわれメラターデ教団のやり方なのだ」

「めら、たーで……？」滅郎は再び力なく呟いた。

「そう、メラターデ教団だ」小男は右側の黒メガネの男にあごをしゃくって「ニゴウ」と鋭く言った。

ニゴウと呼ばれた男は、ストラップで吊し前に構えていたギターを背負う形に器用に持ち替えると、音もなく歩いて滅郎の前まで来た。滅郎は呆然としたまま動くこともできず、男の黒メガネに写る小さく歪んだ自分の姿を見ていた。ニゴウは少し間を置いてから、すばやく右の握り拳を滅郎の顔寸前まで差し出した。滅郎は驚いてよろけ、後ずさった。肩が鉄の扉に当たり、がつん、という音が静まりかえった部屋に響き渡った。

ニゴウはもう一步滅郎に近づくと、再び拳を滅郎の顔の前に差し出した。滅郎は恐怖を感じたが、それを気取

られないように、静かに大きく息をして冷静を保った。男の拳が裏返りながらゆっくりと開き、人差し指と中指に挟まれて一枚のカードが滅郎の目の前に現れた。

滅郎は近すぎて焦点の合わないカードに少しのあいだ目をやってから、男の顔に視線を戻した。黒メガネが闇の色をして男の目を隠している。だが、その無表情な顔に男の酷薄さがはつきりと表れていた。

「取りな」男が言った。

滅郎がゆっくり右手を挙げてカードを取ると、男は再び音も立てずに歩いて元の位置に戻った。滅郎は男が戻っていくのを目の端で捉えながら、そのカードに目を落とした。そこには次のように書かれていた。

メラターデ教団  
団長

カードの左下には、赤い色で穂のようなものが書かれているが、連絡先も書かれていなければ名前も書かれていない。

「滅郎くん、ニゴウが驚かせてすまん。私のところへ来てからというものの、この男もこれで随分丸くなってきたものなんだが、まだまだこのようにがさつなところがあってね」団長はそう言っ肩をすくめた。

滅郎は相変わらずこの奇妙な状況に圧倒されたままではあったが、少しずつ気持ちが落ち着いてきて、ようや

く頭が回転し始めた。このまま相手のペースで行くわけにはいかない、そう思つて滅郎は言った。

「おいちよつと、なんなんだ、きみたちは。こんな夜に人の部屋に勝手に入り込んで。一体どういうつもりなんだ。さっさと出てってくれ。でないと警察を呼ぶぞ」口調は自然と強いものになった。

「団長、シメちまいましょうか」一歩足を踏み出して、黒メガネの男が言った。

「ニゴウ、お前は本当に気が短い。しばらくおとなしくしてろ」

団長がニゴウを見据えて鋭くそう言つと、男は何も言わず静かに一歩後ろに下がつた。

「滅郎くん」団長は滅郎に顔を向け直すと言つた。「われわれの方ではきみのことを少しばかり調べさせてもらっている。例えばきみが大の警察嫌いだということとかね。こつという場合であっても、きみが警察を呼ぶことはない」と、われわれは確信している。違つかね？ そついうわけで、きみの誓し文句のようなものはわれわれには効かんわけだ。ここはひとつ、落ち着いて話し合おうじゃないか」

「落ち着いてだと？」滅郎の怒りは膨らんだ。「どつしてこんな状況で落ち着いて話し合えるのか、さつぱり分らん。きみらはそつやつて遊んでればいいのか知らんが、こつちは明日も会社勤めの身だ。さあ、とつとと帰つてくれ」

滅郎は声を荒げながらも冷静さを保つ努力をし、相手の動きを見守つた。だが三人の男は身じろぎもせず、滅郎の様子をじつと窺っているようだった。部屋は少しの間、静寂に包まれた。

すると団長が小さな体を大きく左右に振りながら言つた。

「滅郎くん、そうカッカしては体に毒というものだ。ちよつ

とお茶でも飲んだらどうかね」

団長がそう言うと、今度は左側の中肉中背の男が動いた。男はまずギターを丁寧な床に置き、滅郎の方に歩き始めた。この男の動きには洗練された柔らかさがあり、黒メガネのニゴウのなめらかだが粗暴な行動とは対照的だった。男は滅郎の前に立つと、どこから取り出したのかペットボトルのウーロン茶を滅郎に向かって両手で恭しく差し出した。

「気持ちはあるがたい、ということにしておくが、見知らぬ人から貰ったものを飲み食いするんじゃないって、お袋からきつく言われてるもんでね」

「ほほう、滅郎くん、お母様のお言葉をそのように大切にしているとは素晴らしい。立派な孝行息子じゃないか。親孝行こそは人類の美德の最たるものだよ。サンゴウ」

その声を聞くと男はウーロン茶を差し出していた手を戻し、優雅な足取りで元の位置へと戻った。

「ではここで」団長が咳払いをして言った。「メラターデ教団、十の教え、第一を。一つ、お父さん、お母さんを大切にしよう」

「お父さん、お母さんを大切にしよう」ニゴウとサンゴウが完璧なまでのタイミングで唱和した。

団長はその顔に溢れんばかりの笑みをたたえながら、滅郎をじっと見ていた。さっきの歌のめちやくちやさ加減、今の唱和の正確さ、そして唱和の内容のまったくの無意味さ……、これらのことが団長の笑いと相まって、滅郎に底知れぬ不気味さを感じさせた。

「さて、滅郎くん」団長がそう言うと、滅郎は相手のペーヌに乗るまいと、すかさず言い返した。

「俺の名前を気安く呼ぶのはよしてくれ」

「なるほど、それももつともだ、日本では下の名前で呼び合うことは普通しないからねえ」団長は大げさに頷きながら言った。「では、四方くん」

「それもやめる。あなたに　くん　付けて呼ばれる筋合いはない」

「なるほどなるほど、素晴らしい自尊心だ。われわれの調査したとおり気骨がある。それでこそ、こちらとしても話し合いのし甲斐があるというものだ。では改めまして……」

団長は、それまで背筋を伸ばしふんぞり返り気味の姿勢で偉そうに構えていたのだが、軽く背を丸めて頭と腰を低くすると両手をこすり合わせながら言葉を続けた。

「四方さん、われわれとしましては、あなたのその素晴らしい才能を見込んで、是非ともお願いがあるわけですね」

団長の、卑屈といってもいいほどの低姿勢への急激な変化に滅郎はたじろぎ、言葉を失った。落ち着け、相手の出方に振り回されるな、こっちのペースを保つんだ……。

この調子ではこいつら、どうやら簡単には引き下がりそうにない、とすれば……。このままでは埒が開かないと思ひ滅郎は口を開いた。

「で、いったい何なんだ、そのお願いっていつのは？」

「四方さん、そうトゲトゲなさらないでほしいものですよ。確かに先程のうちのニコウの行動は無礼だったと思います。本当に申し訳ない。けれど、そのように喧嘩腰の態度ではまとまる話もまとまらないじゃあないですか」「おい、あんた、こっちがおとなしく出てれば、ずいぶん立派な口をきくじゃないか。いくら柔らかいもつともらしい口調で言ったからって、あんたらのやってるのはただの不法侵入だ。こっちはそれを分った上で一応は話を聞いてやろうって言うてるんだ。さっさと用件を言うてくれ。で、用が済んだらとっとと帰るんだ」

「はっはっはっ、四方さん、あなたもなかなか手厳しいですが、四方さん、よく考えてくださいよ。あなただつてバカじゃあない。自分の置かれた立場がどのようなも

のか、そこを考えてみれば……」男は言葉を切ると柔らかない笑顔を浮かべて滅郎の顔をじっと見た。「あなたの立場はおっしゃるほどには優位なものではない、そのくらのことはあなただつて先刻お分りのことでしょう」

そして、男は目をぎらりと輝かせると、腹の底まで響いてくる低く力強い声で言った。

「そういうわけですから、わたしのことを、あなた、と呼ぶのはやめていただきたいのです。わたしのことはどうぞ、団長、と」

団長のその声色を聞くと、鳩尾の辺りに重い感覚が拡がり、滅郎は軽い吐き気を覚えた。滅郎はその圧迫感を押し返そうとなんとか口を開いたが、低い呻き声で言うのが精一杯だった。

「団長……」

「そうですね、それでいいのです」団長は嬉々として言った。「それでこそ、われわれは対等の立場で、パートナーとなるべく、お話ができるというものです。おつと、そう言ってしまったからにはもうお願いを申し上げてしまったも同然ですが、いや何、われわれのお願い自体はごく単純なものでして。ただし、それをいざ実行するととなると、四方さんとしては、いささか大変なことになるかもしれないがね」

団長は両の目をくるくるさせながら、さも楽しそうにそう言つと滅郎の顔を見た。面白いはずらを考えてわくわくしている子ども顔だ。滅郎は不気味さを感じながらそう思った。

「さあ、もうこれ以上余計にお話を引き延ばす必要もなくなりました。われわれの紳士的な態度を四方さんにも十分ご理解いただき、四方さんも紳士的な態度でわれわれの提案を聞いていただけるわけですからね。いえいえ、本当に単純なことなんです。つまり、四方さんには是非われわれメラターデ教団の一員になってほしいと、たつ



たそれだけのことなんですから」団長はようやく本題に入れたことが嬉しくて溜まらないというように満面の笑みを浮かべてそう言った。

相手の言葉の真意をつかみかね、しかし、さっきの団長の低い声色を思い出しながら、滅郎は言葉を選んで言った。

「きみらの一員になれ、だと？」

「そのとおりです」団長はにこやかに、いつそう満足気にそう言うだけで、それ以上のことを説明をするつもりはないようだった。

滅郎が男の言葉の意味に思いを巡らし、どう言葉をつなぐべきかと考えていると、団長が先に口を開いた。

「さて、四方さん」静かな部屋の中、団長の声が響いた。「今日のところはこれで用件は済みました。わたしどもをお願い、どうかよく考えておいてください。よいお返事をお待ちしておりますよ。では、われわれはこれで」

団長のその言葉を合図に、呆然としている滅郎の前で、ニゴウとサンゴウは手際よく荷物を片付けた。団長が滅郎に近づいてくる。

「さあ」そういつて団長は、玄関に立ちっぱなしの滅郎に靴を脱ぐようにつながした。

滅郎が催眠術にかかったかのような夢見心地のなか靴を脱ぐと、団長は滅郎をキッチンに誘導した。

「では四方さん、しばしの別れを！」団長はそれだけ言うと、二人の男を従えてまさしく風のように去っていった。

キッチンに一人取り残された滅郎は、しばらくすると流しの下から泡盛の四合瓶を取り出してきて、湯呑みに注いだ。一口飲んでからベランダに出て、夜の住宅街を見下ろす。彼らの姿を探すかのように視線を彷徨させたが、その痕跡はどこにも見当たらない。生ぬるい空気の中、いつもの平穩無事な街が広がっているだけだった。

何も考えることができずベランダの右端で立ちつくし

ていた滅郎の耳に、エアコンの室外機の音が聞こえてきた。ベランダの左隅に置いてある、自分の部屋のエアコンの室外機の音だった。部屋に入ったときは確かにエアコンはついていなかった。いつの間にか彼らが勝手につけていたのだ。

その些細なことが滅郎の怒りに火を付けかけたが、滅郎は右の拳で自分の腿をどんと叩くと深呼吸して心を静めた。湯呑みの泡盛を飲み干すと、滅郎はキッチンに戻った。まだ、緊張は治まらなかったが、もう一杯泡盛を注いで時間をかけて飲むと、ようやく眠れそうな気がしてきた。

服を脱いでベッドに潜り込み、しばらく頭を空白にしていると、深い闇のような眠りがやってきた。

翌朝目が覚めると、滅郎は強い喉の渴きを覚えた。キッチンに行き、冷蔵庫から野菜ジュースの一リットルパックを取り出す。流しに置きっぱなしにしていた湯呑みをすぎ、ジュースを注いだ。それを一気に飲み干し、もう一杯注ぐ。キッチンの小さな一人用のテーブルに座ると、昨晚のことが頭に蘇った。

スポットライトに浮かぶ、奇妙な三人組。そして、イカした歌と演奏。常識的な理解を拒む、彼らの行動と言葉。その全てが非現実的に感じられ、それが昨晚この部屋で現実に起こったのだということ、滅郎の頭は受け入れることができなかった。夢、だったのではないだろうか。あんなことが実際に起こるわけがない。昨日、一昨日と強いストレスを感じる出来事が重なったことと、酒を飲み過ぎたことから奇妙な悪い夢を見た、そういうことではないのか……。

だが、一方で滅郎の体はそれが現実に起こったことであると主張していた。ニゴウと呼ばれていた男の酷薄さ、サンゴウと呼ばれた男の不思議な物柔らかさ、そして、団

長の不遜だが礼儀正しく、その上奇妙な恐ろしさを感じさせる芝居じみた態度……、こうした全てがあまりにもリアルに思い出される。そしてそのとき、団長の「わたしのことはどうぞ、団長、と」と言う低い声が頭の中に響き渡って、滅郎は吐き気を感じた。滅郎は流しに立つと、喉に人差し指を突っ込んだ。

「うっ」低い呻きを上げて滅郎は吐いた。

吐き終わって、口をゆすぎ、昨日の未消化の内容物を水で流してしまおうと、少し気分がすっきりした。

テーブルに戻ってまたジュースを飲んだ。昨日のことが夢だったのか現実だったのか、それは今は置いておこう。とにかく今日は会社を休むわけにはいかない。重要な打ち合わせがある。二日酔いと昨日の記憶のため言うことを聞くとうとしない体をなんとかだめながら、滅郎は会社に行く支度をした。

会社にいる間、滅郎は前の夜のことほとんど思い出さずことなく過ごした。朝一から取引先との打ち合わせがあり、午前中はそれで潰れた。午後は、相手の要求をこなすための工程を見積もり、チームの人間への仕事の割り振りを計画した。昼まで二日酔いが残り体力的にはきつかったが、仕事に打ち込んでしまえば、ほかのことを考えている余裕はなかった。

勤務時間も終わりに近づき、ようやく仕事に区切りがついた。頭と体の疲れをとろうと深い呼吸を意識的にしながら頭を空白にしていると、昨晚のことがもやもやと頭に浮かんできた。俺の才能を見込んで……、何かそんなことを言ってたな……。滅郎はそう考えかけたが、いや、今はそのことを考えるのはやめよう、と思い直した。そして、長く息を吸っては吐きして気持ちを整めているところへ、電話が取り次がれてきた。

「四方さん、踊野様おどりのよりお電話です」

生子からの電話と聞いて滅郎はとにかく彼女の声が聞きたいと思った。だが、一昨日の諍いのことを考えると、彼女が一体何を言うのか、不安な気持ちも湧いてくる。一瞬電話に出たくないと思ったが、この状況で出ないわけにもいかない。期待と不安が交錯するなか受話器を取った。「仕事中ごめんねえ。てゆうか、今どき滅郎がケータイも持っていないのが悪いんだと思うけどさあ」生子の屈託ない声を聞いて、滅郎は安堵の気持ちも広がるのを感じた。「ああ、まあそれは俺の趣味だから勘弁してもらおうとして、何か用？」自分の心の揺れを気取られないようにと思つて言葉を発すると、自然とつっけんどんな言い方になつた。

「何か用とは、言ってくれるじゃない。おとといのこと、ちょっとは謝ろうかと思つて電話してらつてゆうのにさあ」

「悪い、悪い。ちょっと仕事を立て込んでるもんでね。いや、おとといのことはこつちこそ悪かったよ、ひどい言い方しまつて」

「ああ、それはね、もういいのよ。とりあえず今日は飲み直してことでどう？ 時間ある？」

「仕事は切りがついたし、こつちは大丈夫。いつもの場所で六時半、それでいいかな？」

「おっけー」

「じゃあ」

電話を切つた滅郎は、肩すかしを食らつた気分だつた。

一昨日の彼女の剣幕から一体どんな電話なのかと身構えていたのに、ふたを開けてみれば、あまりにも上機嫌な今の彼女の様子に、ほつとはしたものの複雑な想いが湧いた。今までにも似たようなことは何度かあつた。彼女は過ぎ去つたことについては本当にさばさばしている。それと比べたときの、自分のこだわりがちな気持ちや、過剰な心配。滅郎は自分の弱点を感じると同時に、そうし

た自分とは対照的な生子と一緒にいられることの小さな幸せを噛みしめた。

生子と駅で落ち合うと、滅郎は挨拶以上の言葉は交わさず、黙ったままいつもの飲み屋へ向かった。席に案内され、滅郎が瓶ビールと腹に溜まるつまみを頼むと、二人は何も言わずしばらくお互いを見つめた。生子はおだやかな顔をしていたが、滅郎は自分の緊張を感じ、煙草に火をつけ注文の品が来るまでの時間をやり過ごした。

ビールが来るとまず生子のグラスに注ぎ、それから自分のグラスに注いで滅郎は言った。

「じゃあ、とりあえず、お疲れ様」

生子はグラスを取ってカチンと滅郎のグラスに合わせたが何も言わず、ビールを半分ほど飲むとグラスを置いた。滅郎はとにかく口を開いた。

「いや、おとといは本当にすまなかった」

それを聞くと生子は笑いながら言った。

「ホントーにすまないと思ってるの？ 滅郎のホントーはちつとも当てにならないからなあ……。でも、そのことはもういいの。それがね……」

そう言っただけ生子が話すには、昨日直子と会って、マルチ商法について滅郎がこう言っていたと話したところ、直子は、そうか、やっぱりちよつと無理なことやっちゃってたんだな、と答え、迷惑かけてごめん、と生子に謝ったのだという。

滅郎はそう聞いて一安心し、ろくに口をつけていなかったビールを一息で飲み干すと、再び瓶から注いだ。生子は直子の話を続けていたが、滅郎はやや上の空で、ぼんやりと昨晩のことを思い出していた。こうやって生子と一緒に飲んでいると、なおさら昨日のことが夢の一場面だったような気がしてくる。あれはやはり夢だったのではないのか。会社での立場上の問題に、生子との争い、そ

して週初めから酒を飲み過ぎたことも手伝って、普段ではありえない妙ちきりんな夢を見た　　そういうことなのかもしれない……。

「滅郎、もう一本飲む？」生子が自分の空のグラスを手にして言っていた。気がつくとな滅郎のグラスも空だった。

「そうだな、もう一本いこう」

ビールがきて、また滅郎が二人分のグラスに注ぐと、生子は言った。

「どうかしたの？　なんか考え込んでるみたいで？」

滅郎は生子の顔をぼんやり眺めながら、どう話したものかと考えた。生子は不思議そうな顔をして滅郎の顔をじっと見ている。

「どう言ったらいいのか、ちょっと悩んじゃうんだけどね……」滅郎はとりあえずそう言った。

「おとこのことが引つかかっているの？」生子はやや心配そうな顔になって言った。

「ああ、いや、そのことじゃない。生子とのことじゃないんだ。その、ぼく自身の問題というかね……」

「滅郎自身の……？」滅郎のはっきりしない物言いに、生子はますます不思議そうな顔をして言った。

「ええと、いや、ちょっと待って、ぼく自身とっていいの、つまりそう言えばそうかもしれないんだけど、ひょっとしたらそうじゃなくて、ぼくに関心を持っている誰かの問題という気もするし、その、今はちょっと説明が難しいっていうかね……」

「それってどういうこと？」眉間にしわを寄せながら生子は言った。「何言ってるんだかよく分らないんだけど。女でも絡んでるわけ？」

「いや、それは違う、全然そういう話じゃないんだ。それは絶対保証する。その手の面倒な話だったら、ちゃんときみに相談するさ。そんなふうな話とは全く違うんだけど、ちょっと今は話しにくい感じなんだよ。その、もう少

し話が落ち着いたら、きちんと話すからさ。今はちょっと勘弁してくれないかな」

「ふーん」生子はそう相づちを打つと、十分納得したふうではなかったが、それ以上そのことについて訊くことはしなかった。

滅郎の中には生子に全てを話してしまいたいという気持ちも確かにあった。しかし、あのような奇妙な体験をどう説明したらいいのか。生子がそれを現実のことと受け止めるにせよ、滅郎の精神的な問題と受け止めるにせよ、どちらにしても生子にはどうすることもできないだろう。そんなことで余計な心配をかけては、と滅郎は思った。これはまだ自分の心の中にしまっておいて、時間が何かを変えてくれるのを待ったほうがいいのだ、そう滅郎は考えた。

「じゃあ、滅郎、無理しないでほどほどにね」駅まで送ると生子は手を振りながら言った。

ほどほどか、何をどうほどほどにしたらいいんだろっ、そう思いながら滅郎は手を振り返した。

「ああ、じゃあ、また金曜に」

そうして生子と別れて家へと帰る道すがら、滅郎の頭には昨日の三人組の映像が渦巻き始めていた。

不可思議な衣装を身につけた彼らがスポットライトに浮かび上がり、めちゃくちゃな演奏をしながらおかしな歌を歌う。そして彼らとの奇妙なやりとり、団長の重く響く声色……。滅郎は体に変調を感じた。腹から力が抜け、腰に緊張が生まれる、そして鼓動が速くなる。体の緊張を和らげようと深呼吸をしながら滅郎は考えた。

昨日のことが現実のことだとすれば、彼らは一体何もので、何の目的で自分に近づいてきたのか。俺の才能のことを言い、俺のことを調べていると匂わせていたが、果たしてどれだけの調査をしているというのか……。ある

いは、あれが疲れすぎて見た幻、強い緊張のために見た異様にはつきりした夢だったとすれば、そのとき俺はどうしたらいいのか。滅郎は医者のお世話になりたいなどとはさらさら思わなかったが、場合によっては心療内科にも行ったほうがいいのだろうか……。

自宅のある鉄筋アパートが見えてきたところで滅郎は立ち止まり、四階の自分の部屋を見上げた。両隣の部屋は明かりが点いていたが、自室の窓は暗く、特に変わった様子はない。滅郎は再び歩き出し、エントランスを抜けて階段を四階まで昇る。いつもと違い、妙に階段が長く感じられる。部屋の前に立って、鍵を差し込む。

鍵が回らない。

滅郎の手は緊張で震えた。

一度抜いてもう一度しっかり差し回そうとするがやはり回らない。

はっと思つて表札を見ると、五三、山本、と見知らぬ名が記されていた。緊張の余り間違つて五階まで上がつてしまつていたのだ。自分の間抜けさにあきれて苦笑いしながら滅郎は四階に降りた。今度こそ自分の部屋の鍵を開ける。扉を開けて、今日は後ろ手に扉を開け放しにしたまま部屋の電気を点けた。部屋には人の気配は感じられなかった。

滅郎はそれだけでは安心することができず、部屋中の電気を点けて回り、トイレ、浴室、クローゼットに至るまで中を確かめた。そうやって部屋の中を全部確認し終わると、ようやく少し気持ちが落ち着いていた。

流しの下から泡盛を取り出し湯呑みに注ぐと、キッチンテーブルに座つてそれをちびちびと嘗めた。飲みながら昨日の晩のことを思い出し考えようとしたが、思考は堂々巡りをするばかりでどこにも滅郎を導いてくれなかった。頭の中には、三人組の姿がくっきりと浮かび上がり、珍妙なギター之音と歌が溢れかえるばかりだった。



ふと気がつくのと体の感覚がおかしかった。自分の体が木偶人形になってしまったかのようだ。

自分がキッチンテーブルに座っており、左手でテーブルの上のコップを軽く握っていることは問題なく認識できるし、思考自体は正常に働いている。ところが、目に写る光景は映画の書き割りでも見ているかのように非現実的な感じがし、自分の体が自分のものと思えない。体から全ての力が抜けてしまったかのようで動くことができな。しかし、動きようがないというよりは、動こうという気持ちが起こらないのだ。まるで意志というものがどこかへ消え失せてしまったかのようだった。

もはや自分のものではない自分の体が虚無で満たされていくのを滅郎は感じた。空虚なものにもかかわらず、得体の知れぬ何ものかに満たされているため、手と腕が不愉快なまでに厚ぼつたい。体の中の空虚さが凝縮して次第に熱を増していき、もうじき爆発するのではないかとすら滅郎は感じた。

滅郎は無理に動こうとはせず、ただそのままそれが過ぎ去るのを待った。

怖くなかったわけではない。今までも似たような状態を何度か体験したことがあったが、そのいずれのときも滅郎は恐怖を感じたし、まして今回のものは今までの中でももっとも深い体験だった。もうこの状態から出られないのではないかと思うと、滅郎の恐怖は今にも膨れあがり破裂しそうだった。だが滅郎には、このまま流れにまかせれば、やがてこれは終わり、また普通の自分が戻ってくるはずだという、根拠のない確信があった。そこで滅郎は恐怖心をなんとかなだめた。

そして滅郎は待った。

やがてそれは去った。

それが三十分だったのか一時間だったのか、それともほんの二、三分のことだったのか、滅郎には分らなかつ

たし、知りたいとも思わなかった。

滅郎は残っていた泡盛を飲み干すと立ち上がり、着替えもせずそのままベッドに潜り込んだ。

2

そして、一日が経ち、二日が過ぎ、一週間、二週間。気がつくとも事も起こらないまま一ヶ月が過ぎていた。

その頃には滅郎はあの奇妙な三人組のことはほとんど忘れかけていた。最初の一週間ほどは部屋に帰ると誰かが潜んでいるのではないかと気にかかり、部屋のおちこちを確かめるようなことが続いた。それとは対照的に、会社では仕事に没頭し、週末は生子とのデートに意を注いだ。そうやって日常的な生活を続けているうちに、滅郎はその出来事を意識の片隅に追いやり、大きな喜びはないにしても平穩無事な日々を送るといふ、慣れ親しんだ状況の中に自分を滑り込ますことに成功しつつあった。

その日、会社帰りの滅郎は、あまりの暑さに根を上げ、改札を出ると駅前のビルのビアガーデンに向かった。

滅郎は冷房が苦手だった。列車はできる限り弱冷車に乗るが、それでもたいてい寒すぎて長袖のシャツをはおる。その寒い列車から降りるとほっとするくらいのことが多いのだが、その日は違った。東京では連日四十度という猛暑が続く、しかもその日は温度に加え、猛烈な湿度が襲いかかってくる。六時を回っているというのに、暑さと湿気が街を支配している。地球温暖化という言葉が滅郎の頭に浮かんだ。

駅前の冴えないシヨップングビルに入り、屋上まで階段を昇っていく。暑さでバテている身に七階分の階段はこたえたが、冷えたビールをうまく飲むためと思えば天国へ至る階段と考えることもできた。

壁が高く、座ってしまえばおおむね空以外何も見えな  
い殺風景なビアガーデンの席で、空豆をつまみに滅郎は  
ビールを飲んだ。平日でもあるし、まだ時間が早いせい  
だろう、滅郎のほかには客もほとんどいない。がらんと  
した灰色のビアガーデンで、力の抜けるようなハワイア  
ンを聞くとともにしに聞きながら、滅郎はビールを飲み干  
した。

アルコールが入って気持ちが悪くなった滅郎は、夏の  
夜の生ぬるい空気の中、自宅への道をのんびりと歩いて  
いた。ようやく少し気温も下がり、まだ空気はじつとり  
と絡みついてくるのだが、今の滅郎には、その重い空気  
が肌をなでるのも心地よいものに感じられた。仕事で抱  
えるプロジェクト上の問題も、酔ってリラックスした滅  
郎には、なんでもなんでもにピリピリして考え込んでいたん  
だろう、どうせなるようになるんだからと、軽く受け流  
すことができるのだった。

足取りも軽く、ゆっくり歩いていくと、鉄筋アパート  
の入り口が近づいてくる。植え込みのサルスベリの白い  
花がひとときわ鮮やかに滅郎の目に飛び込んできた。こぼ  
れんばかりに咲き誇る満開のその花を見ると、滅郎は不  
思議と優しい気持ちになった。そうだ、もうじき生  
子の誕生日だ、今年はどうな花束を贈ろうか……。

そんなことを考えながら階段で四階まで上がり、鍵を  
回して扉を開け、後ろ手に閉める。そして明かりを点け  
ようと手を伸ばしかけたが、何かの気配を感じて、滅郎  
はその手を止めた。その場に立ったまま、しばらく様子  
を窺う。特に何も感じられなかった。改めてスイッチに  
手を伸ばす。

その瞬間である。

スポットライトの光が炸裂した。

あの三人組が、前回と寸分違わぬ舞台装置の中、奇妙  
なメキシコ風の衣装を身にまとい、光の中に立っている。

そしてまた、イカれた演奏と歌が始まった。

「メララー……」

「たーで」

「メララー」

「たーで」「ターデー」

またも意表を突かれた滅郎ではあったが、今回はその場で起きている珍妙な状況を眺めながら、考えを進める程度の余裕はあった。

滅郎は警察を呼ぶことを考えた。だが、この男たち相手では警察は役に立ちそうにない。かといって他に助けを求める知り合いの顔も浮かばなかった。仕方ない、少しこいつらの出方を見ることにしよう。とりあえず玄関口に立っていれば、いつでも逃げることはできる……。

「ようこそ、四方さん」団長が底抜けの明るさで呼びかけた。「では本日はまず、メラターデ教団、十の教え、第二を。一つ、自分のことは自分で責任を持つ」

「自分のことは自分で責任を持つ」「ニゴウとサンゴウが唱和した。

団長は顔に満面の笑みを湛えたまま滅郎をじつと見ていた。またこのナンセンスか……。滅郎はそう思いながら深い呼吸をして気持ちを落ち着けようとした。

「さて四方さん」団長は咳払いを一つすると重々しい口調で話し始めた。「われわれの用件はこの間お伝えしたとおりです。すなわちあなたにわれわれメラターデ教団の一員になっていただきたい。なにしろあなたはまったく素晴らしい人間ですからな」

そのままじつと聞いていると頭がどうにかなりそうだったので、滅郎は悪いものを振り落とすかのように頭を小刻みに左右に振った。

「いやいや謙遜なさらないください」団長は言葉を続けた。「四方さん、天才という呼び名はあなたのために作られたようなものじゃないですか。まさに生まれつきの

天才、二十歳はたちすぎてもただの人にならない、正真正銘の天才です」

そこで団長が間をおくと、ニゴウとサンゴウが口を揃えて言った。

「正真正銘の天才です」

二人の声は見事なまでに重なっていたが、ニゴウの声には明らかに人をバカにした響きがあり、一方サンゴウの声は柔らかく人の気持ちを包み込む優しさを持っていた。その二人の声の対比が滅郎の頭の中に冷たい沈黙を作り出した。

「さあ四方さん、ではわれわれの一員になっていただけますね？」団長は滅郎の様子など意に介せず、そう言った。

滅郎が口を開かずじっと自分の中にこもっていると、団長は、滅郎の姿を足先から頭のとっぺんまで二度、三度眺め回したあげく、更に芝居がかった口調で言った。

「沈黙をもって承認の証しとする」

その言葉を聞いて滅郎の中でスイッチが入った。

「ちよつと待ってください」

「ほう、何を待ちましようか、四方さん？」団長は両の目を見開きくると時計回りに黒目を回した。

「お前らの一員になるとかならないとか、そんなことをお前に指図される覚えはこれっぽっちもないんだがな」

「四方さん、わたしのことは、団長と呼んでいただくようお願いしたはずですがお忘れのようですね。が、しかし、それはまあ良しとしましょう。そこです、むしろ四方さんには、仰るとおり覚えのないことに違いありませんが、それも運命と受け止めていただきたいのです」

「運命だと？」

「そうです、運命、すなわち、定めです。われわれ人間を含め、この宇宙の全存在は、この世界をつらぬく時の流れの中、どのような道を歩いていくかということについて、定められた運命があるのです。四方さん、いわば

あなたは神によって選ばれたのです。その事実を曲げることは誰にもできません」

「分った」滅郎は舌打ちして言った。「お宅のような人間とエセ宗教論議をしても始まらない。単刀直入に聞こう。お宅らの狙いは一体何なんだ？」

「狙いなどと、人聞きの悪いことを」団長は柔らかに微笑みながら言った。そしてまた一つ咳払いをし、体を少し揺すって居住まいを正してから言葉を続けた。「よろしいでしょう。四方さんを一員として受け入れた以上、もう一歩話を進めましょう」

滅郎は、一員として受け入れた、という団長の言葉にくらくらするものを感じたが、深く息をしてなんとか冷静さを保ち、口ははさまずに団長の言葉の続きを待った。

「さて、まず一つめのお願いですが……」もったいぶった間をとりながら団長は言った。「四方さんが協力してくださる気になってくださった以上、こちらの件に関しては何ら難しいことはございません」

協力するなんてこれっぽっちも言ってないぞ、と滅郎は思ったが、今度も何も言わず黙って聞いた。

「つまりですね、四方さんがお仕事で担当していらっしゃるプロジェクトの情報、これを折に触れてわれわれに報告していただく、ただそれだけのことなんです。どうです、まったく簡単なことでしょうか？」

「おい、ちょっと待て。どうして俺がそんなことをするんだ。俺が仕事の情報を横流しするような人間だとも思ってるのか？」滅郎はイライラしながら言った。

「もちろん通常の仕事なら四方さんはそんなことはなさらないでしょう」団長は落ち着き払って言った。「しかしです、われわれが今問題にしているプロジェクトは他にもない、例の、軍事関連のもんです」

そこで長い間を取ると、団長はじっくり滅郎の表情を窺った。

滅郎は考えた。ふん、なるほど、こいつはあのプロジェクトのことを知っている、社内でもあれが軍事関連のものであることは数人しか知らないはずなのにな。うちの会社の情報管理なんてお粗末なものだから、どこから漏れてもおかしくはない。それにしても、とにかく、それなりの調査とやらはしているわけだ……。

「そして、四方さん」団長は滅郎の目を見ながら話を続けた。「あなたは戦争だとか人殺しだとか、そういう類のものを決して快く思っていない。そうですね？　そこで、四方さんにはそのプロジェクトの情報をわれわれに流していただく。四方さんが決して疑われることのないよう細心の注意を払った上での受け渡しです。その情報を使って後々われわれが軍の目論見をサポートしジュするわけですが、四方さんにご迷惑がかかることは無論ありません。どうです、悪い話じゃないでしょう？」

そう言われて、滅郎の頭の中には不可解とも思える想像が広がった。

確かにこのプロジェクトは会社の方針に合わせて仕方なくやっているだけのものだ。技術的には面白みもあるから、とにかくやってはいるものの、根っここのところでやりたくない気持ちがあるから、今までの仕事とは違い、どこか引かかったまま、うんざりした気分を抱えたまま、ずるずると仕事を続けている。こいつらのことがどの程度信用できるかといえば、これはまったくの未知数だが、もしこの状況を逆手に取って、俺の人生のある種の結ばれを打開することができるとすれば、それは、ひよっとして、面白いことかもしれない……。

「どうです、四方さん、なかなかいい話だと思いませんか」団長は滅郎の心の動きを計ったかのように畳みかけてきた。だが滅郎はそこで頭を振った。

「いや待て。そんなことをして俺になんのメリットがあるっていうんだ？」

「メリットとおっしゃいますか」団長は余裕の笑みを浮かべて言った。「それはいろいろと御座いますよ。四方さんを一員として迎え入れる以上、われわれといたしましても、十二分の用意をさせていただきます。差し当たって必要な金額があればお聞かせ願えませんか？」

それを聞いて滅郎は考えた。「この進み方はうまくない。相手のペースにはまってる。俺はやるなんて決めたわけじゃないんだ。こんな流れは断ち切らなくては……。」

「金の話はやめてくれ。俺ははした金でつられるような人間じゃあない」

「ほう、そつですか」そう言って団長は、右に立つ二ゴウに顎で合図をした。二ゴウは、すつと後ろ向きにしゃがむと、スーツケースを取り出して前に置き、かちやりと音を立てて開けた。そして中身が見えやすいように滅郎のほうに床の上を滑らせた。

スーツケースには一万円札の札束がぎっしりと詰まっていた。

ぎっしりと？ 滅郎は思い直した。ぱつと見には万札がぎっしりに見える。しかし、こいつらの胡散臭さを考えてみる。額面通りに信じられるもんか。

「四方さん」団長がにやにやと笑いながら言った。「この札束が本物かどうか、疑ってますね？」

「もちろんだ。疑って何が悪い」

「いえいえ、もちろん何も悪いことなど御座いません。ただ、これが本物かどうかは、四方さんがお手元において、実際に使っただけはすぐに分る事です」

「そんなことはとてもできないね。仮にあんたに協力する気になって、その金を使ったとする。その途端、強盗事件が偽札製造の犯人として捕まりかねないじゃないか」

「はっはっは、さすが四方さん」団長は満足そうに笑った。「札束を見せられても動じなければ、それが曰く付きのものだったときのこと、とっさに考えていらっしや





いわば英雄とも言えるような女性でしてね。本名をマルガレータ・ヘールロイダ・ツェレと申しますが、ジャワの血を引きながらオランダで生まれた彼女は、パリで踊り子として活躍しておったのです。そこへ第一次大戦が勃発しました。高級娼婦でもあった彼女はフランスとドイツの間で二重スパイとして活動することになったのです」

そこで言葉を切ると、団長はまた滅郎の様子をじっと窺った。滅郎はじつと立ったまま動かない。団長は言葉が続けた。

「悲劇的なことに彼女は、ドイツのスパイをしていた容疑でフランス軍に処刑されることになりました。彼女は三流の諜報要員にすぎなかつたとする見方もありますが、われわれはそのようには考えません。当時オランダに植民地として支配されていたジャワの血を引く彼女は、国際的な謀略に飲み込まれ、悲運にも命を落としましたが、彼女はまだ見ぬ父祖の地、ジャワに対する熱い郷愁の念を抱き、その地を見るといふ願いが叶わぬ中、なんとか自分の生きる場所を見いだそうとして、危険を顧みず、死を恐れることもなく、スパイとしての活動に身を投じたに違いないのです。彼女のその情熱と勇気がわれわれの心を打つのです」

そこで団長が問をおくと、再びニゴウとサンゴウが口を揃えて言った。

「われわれの心を打つのです」

滅郎は自分の意識がふわふわと漂い出すような奇妙な感覚を覚えた。

「さて、そのマレー、インドネシアの言葉で、赤を表すのがメラという言葉です。われわれの改革への情熱を表す象徴の色、赤、メラメラと燃え立つ炎の赤です。そして、わたしが子どもの頃から大好きだった赤い蓼たの花、この花は可憐な小さな花ですが、われわれの小粒でもピリリと辛い行動の姿勢を表します。賢明な四方さんにはこれ

で十分お分りいただけただけのことでしょう」

そこで言葉を切ると、団長は両腕を頭上に高く上げ、叫んだ。

「赤き情熱、我らがメラターデ教団、バンザーイ」

「ばんざーい」「ニゴウとサンゴウも両手を上に上げて叫ぶ。

「バンザーイ」「ばんざーい」

「バンザーイ」「ばんざーい」

三人の万歳三唱を聞いて滅郎は、できの悪いSF仕立ての芝居を見ているような錯覚に陥っていった。

部屋の雰囲気が落ち着くのを見計らうかのように、しばらく間をおいてから団長は言った。

「サンゴウ、四方さんにお土産をお渡ししなさい」

団長の左に立っていたサンゴウは、前回と同じく優雅な動作で大きなポストンバッグから立派な花束を取り出すと、滅郎に歩み寄り恭しく差し出した。

「さあ、お取りください」と言ってサンゴウは、呆然としている滅郎に更に高く花束を差し出す。滅郎は夢を見ているような臆な意識の中それを受け取った。

サンゴウが元の位置に戻ると団長が言った。

「四方さん、本日もわれわれの行動にお付き合いました。誠ありがとうございます。では、今日のところはこれまで！」

威勢の良い団長の言葉が部屋に響くと、ニゴウとサンゴウはまた手早く荷物を片付けていった。

気がつくともたまた滅郎は一人自分の部屋に取り残されていた。

手渡された花束に見るとはなしに目をやると、それはいわゆる豪華な花束ではなかった。雑草を少し立派にしたくらい小さな赤い花が、たくさん集まって穂になっている、その一種類の花だけを使って大きな花束が作られていた。

滅郎の頭に、子どもの頃、近所の女の子に付き合わされておままごと遊びをしたときに使ったアカマンマの花のイメージが浮かび漂った。

3

滅郎はキッチンのテーブルに一人腰掛け、泡盛の入った湯呑みを両手で握りしめていた。しばらく前から滅郎の頭の中を、「二度あることは二度ある、二度あることは二度ある……」と同じフレーズが繰り返し回り続けている。

彼らの二度目の訪問から再び一ヶ月が過ぎようとしていた。

会社では仕事に打ち込み、週末は生子とデートをすることで、滅郎はあの三人組のことを忘れ、何とか日々を過ごしていた。しかし、問題は一人でいるときだった。ふとしたきっかけで彼らのことが頭に浮かぶと、それを意識から追い出すことが難しくなってきた。

今日の昼間、会議室でスズキと二人プロジェクトの打ち合わせをしていたときのことだ。取引先がうるさいことを言ってくるため、二度目の大幅な設計の変更を余儀なくされていた。そのことについて相談をしているとスズキが言った。

「いや、しかし、まいったなあ。これだけの大規模な設計変更とはなあ。しかも相手が相手だから、これで済むかも心配だよな。二度あることは二度ある、とも言っしさ」その言葉を聞いて滅郎の頭には彼らのイメージが浮かび上がった。滅郎はそのやけにはつきりとした映像を振り払おうと、両手を組んで頭の上に伸ばし、左右に軽く振って伸びをしながら言った。

「そうだな。そんなことにならなきゃいいんだが」

そして、会社を退けて帰りの混み合った電車の中、前

触れもなく滅郎の頭にそのフリーズがやってきた。

「二度あることは二度ある、二度あることは二度ある……」

滅郎はほかのことを考えてそのフリーズを頭から閉め出そうとしたが、しばらくは追い出すことができて、やがてまたそのフリーズは舞い戻ってきた。滅郎は気にするまいと思ひ、そのフリーズが頭の中を回り続けるにまかせた。

キッチンでテーブルで滅郎は泡盛を口に含むと、湯呑みを手にしたまま椅子から立ち上がりベランダに出た。もう日が暮れてだいたい立つというのにまだベランダのコンクリートには昼間の熱気が感じられた。今年は残暑が厳しく九月に入っても真夏のような毎日が続いている。

じつとりとした空気の中、夜の住宅街をぼんやり眺めていた滅郎は、ふと寂しさを感じた。自分がこの世の中でたった一人で生きているような気がした。一体俺の人生はなんなのか、生きていくことに何の意味があるのか、そんな疑問が頭に浮かんだ。自分の立っている足下がぐにやりと溶ろけ出し、どことも知れぬ闇の中に飲み込まれてしまいそうな不安がやってきた。

しばらくその不安とともにベランダに佇んでいると、やがてその感覚は薄れていき、長い呼吸をして気持ちを鎮めようとしている自分に滅郎は気がついた。頭の中を執拗に回り続けていたフリーズはいつの間にか止んでいた。

滅郎はまた一口泡盛を口に含むとキッチンに戻った。

キッチンのテーブルに座り直した滅郎は、湯呑みに泡盛をもう一杯注ぎ、平らになった気持ちの中、彼らのことを改めて考えてみようと思った。

しかし考えるといつても何をどう考えたらいいのか……

……。この一月の間、滅郎は彼らのことはできるかぎり考えないようしてきた。考えても仕方のないことだと思っただからだ。誰かに相談しようかと思ひもした。だが、こんな奇妙な事態を一体誰に相談したらいいのか。誰に相

談してもこちらの精神状態を疑われるのが落ちという気がした。彼らとは自分一人で立ち向かうしかない、彼らの手口を考えるとそれ以外の選択肢はない、そう滅郎には思えた。だからといって、滅郎に何ができるかと言えば、特に有効な対策が打てるわけでもない。彼らの揺さぶりに動じないように心構えを固める、それくらいしかできることはなかった。

ところがその心構えの部分が怪しくなってきた。仕事をしているときや人に会っているときはまだ良かったが、一人でいるとふいに彼らの映像が頭に浮かぶ。スポットライトに照らされて奇妙な衣装で奇天烈な演奏をする三人の男たち、団長の不愉快なまでに落ち着いて尊大な様子、ニゴウの酷薄な態度、そしてサンゴウの完璧なまでに洗練された振る舞い……。そんなイメージが頭の中にいったん浮かぶと、なかなかそれを振り払うことができなかった。そして、彼らのイメージが頭の中で暴れ出すと、得体の知れない焦りに取り憑かれ、いつもの自分の落ち着きを取り戻すことが次第に難しくなってきた。気が狂うというのは、こういう状態を言うのかもしれない、と滅郎は思った。

この一週間ほど寝つきが悪く眠りも浅かった。夜中に目が覚める。いったん目が覚めるとそのままでは眠ることができないので泡盛をあおった。こんなことを続けていればアルコール依存症になるのではないか……。

このような状態でよく仕事ができるものだ和我ながら思ったが、この異常な緊張状態がある種のエネルギーとなるのか、昼間の日常には差し障りがないどころか、今までより充実しているくらいなのであった。

だが、これを続けていては、いずれ体力的な限界が来るだろう。そうなったとき日常というものが、砂で作られた城のように容易く崩れ落ちるさまが、滅郎の頭の中にくっきりと映像を結んだ。恐らく彼らの狙いはそこに

あるのだろう。俺を精神的に追い詰めて、落とそうとしているのだ。彼らの手に乗ってはダメだ。滅郎は頭を振るって力を呼び覚まそうとした。

翌日滅郎が会社に着いてコーヒードで一服していると、スズキがここにこしながら滅郎の机にやってきた。

「滅郎、いい知らせがあるぞ」スズキが思わせぶりに言った。

「なんだ、いい知らせって」滅郎は素っ気なく聞き返した。

「お前の反応はまったくひねくれてるなあ。いや、とにかくいい知らせなんだ。お前のメビウス・ツイン・リングズな、あれがJCNに売れそうなんだ」スズキは滅郎の肩を叩きながらそう言った。

「JCN？ ジャパン・コンピューティング・ネットワークか？」

「そつだ、お前のメビウス・リングに大物が食いついてきたんだ」スズキはこぼれんばかりの笑みを浮かべていた。

メビウス・ツイン・リングズは、滅郎がしばらく前に出した特許の愛称で、社内ではメビウス・リングと呼ばれるのが普通だった。滅郎としては会社がせつつくから仕方なく出した特許でしかなかったのだが、スズキはそれをいたく気に入っており、あちこちに売り込みを図っているとは聞いていた。それで、滅郎は聞いた。

「JCNと言ったって、いくら出すっていうんだ。どうせ大した額じゃないだろう」

「いやいや、これが実に大したことがあるんだが、それはちよつとまだ正式に決まった話じゃないから、今のところは内密に、ということだな」

こんな大きな声で話しておいて何が内密だと滅郎は思ったが、そのことには特に触れずに言った。

「そつか、じゃあ、そつちはとにかくよろしく頼むよ」

「おお、まかせとけ。これがうまくまとまったら、今度

こそお前にも好きなようにやらせてやれるからな。期待して待てるよ」

そういうとスズキはにこやかに去っていった。

スズキの言葉なんて当てになるもんじゃない、そう思いながら滅郎はその日のスケジュールの確認に取りかかった。

会社が終わると滅郎は、電車に乗っていつもの経路で帰ったが、自宅の最寄り駅では降りず、二駅先の、急行が止まり大きなショッピングセンターのある駅まで行った。そのショッピングセンターの三階に心療内科ソウルフルクリニクはあった。

会社の人間で心療内科の世話になっている人間は何人か知っていたが、自分が行くのは初めてのことだった。子どもの頃に聞いたような昔の精神病院とは違うのだと頭では分かっていても、そこで何が起るのかと考えると、滅郎は軽い不安を感じた。

扉を開けて入ると、待合い室は小綺麗だったが、どこか息詰まる空気が充満している。その待合い室のソファに腰をかけて優に一時間は待たされることになった。一緒に待っている他の患者たちは、男女ともに大体は会社員風だった。彼らの様子に目立っておかしいところは無いのだが、重たいような、そわそわするような、妙な空気が漂っている。待合い室にいただけで反って調子を悪くしそうだったが、とにかくそこで待つしかない。

ようやく受け付けから呼ばれたときには、滅郎は目を閉じすっかり自分の中に引きこもっていた。受け付けの女が自分の名前を繰り返し呼び、何度めかになって、滅郎はようやくそれに気がついた。受け付けまで行くと、女はいらだちを隠せない様子で滅郎に診察室を示した。

診察室の医者はまだ若い神経質そうな男だった。滅郎が夜眠れないので薬がほしいというと、いつ頃からかと



か、どの程度眠れないかなどの簡単な質問をするだけだった。滅郎は込み入った話はしたくなかったので、彼らのことは一切言わず、会社のことで眠れないというように説明しようと思っていたのだが、そういった類のことはまったく聞かれなかったのでもっとした。医者には、では、お薬を出しますので、と言って、睡眠導入剤の簡単な説明をすると、診察は十分もかからずに終わった。

滅郎は同じフロアにある薬局で薬をもらうと、駅の改札口へ向かって歩き出した。重い足取りで歩きながら、どうやら一区切りついたと思いい、慣れないことをしたあとのくたびれ果てた感覚を感じながら、とにかくビールを飲もうと滅郎は思った。

駅構内のざわつく店に入り、中ジョッキとペペロンチーノを頼む。空腹はそれほど感じなかったが食べた方がいいと思った。やってきたビールをぐいと飲み、やや茹ですぎで塩気の足りないスパゲティをつついてみると、ようやく気分が落ち着いてきた。これから何がどうなるのかと思うと漠とした不安を感じはしたが、とにかく何とかやっていけそうだという思いもわずかながら湧いてくるのを感じた。

家に帰った滅郎はキッチンのテーブルに腰を下ろすと、木綿地のリュックから薬局でもらった説明書きと薬の袋を取り出した。大したことが書いてないおざなりな説明書きに一応目を通してから薬を取り出し、処方された量の倍量を口に含む。流しまで行くと蛇口の水を手を受け、そのまま口に注ぎ、薬を流し込んだ。まだ時間は早かったが、疲れを感じていた滅郎は服を脱いでベッドに潜り込んだ。

しばらくすると急に眠気が襲ってきて滅郎は泥のような眠りに落ち込んでいった。

どこか頭の内側の遙か遠くの片隅に、滅郎は何物かの気配を感じていた。それが一体何物なのか、確かめようとして知覚の触手を伸ばしてみるのが、もう指が届いてもいいはずと思うのに、その何物かは手のひらからさらさらとこぼれていく砂粒のように小さな闇の間へと姿を隠してしまい、はつきりと捉えることができない。滅郎が触手を伸ばすと、そのものはするりと身をかわす。そんな知覚の追っかけっこを幾度となく繰り返しているうちに。

突如世界は光の爆発で切り裂かれた。

「メラーーーーー」

「たーで」

「メラー」

「たーで」「たーで」

まだ回転を始めようとしないう滅郎の頭に、あの、もはや馴染みのというしかない、不愉快な歌と演奏が凶器となって襲いかかってきた。薬の効きが残っていて不自然に重い頭と体になんとか力を入れ、滅郎はベッドの上で上体を起こした。

例の三人組がいつもの衣装を着て、スポットライトの光のなか輝いて立っている。今日はキッチンに陣取り、てんでんばらばらに、だが不可思議な調和を持って教団のテーマソングを歌い続けた。

「われらは」

「メラ、ターデ」

「赤く赤く」「燃えるー」

勝手に燃えてる……。靄がかかったままの意識の中、滅郎は力なく思った。ただし人を巻き込まないでくれ……。

「ようこそ、四方さん」演奏が終わると団長は、あくまで朗らかに滅郎に呼びかけた。「こんな夜分遅く、しかもお休みになっているところに押しかけまして、誠に申し訳ありませんな」

言葉だけは礼儀正しくそんなことを言っているが、悪いことをしている意識のかけらもないことは、その口調を聞けば火を見るよりも明らかだった。

「では、本日も、メラターデ教団、十の教えの第三を。一つ、地球は一家、草虫獸くわちじゅうものすべてが兄弟姉妹」

「地球は一家、草虫獸すべてが兄弟姉妹」ニゴウとサンゴウが唱和した。

次の瞬間ニゴウがぱちんと両手を合わせた。

ニゴウは叩いた手を開き、右の人差し指で左の手のひらをぴつとはじいた。そして再び両の手を胸の前で合わせると言った。

「南な無む一む」

「なんだ、ニゴウ」団長が言った。「蚊か。敬虔に祈ることとはよいが、虫けらだつて兄弟姉妹と唱えたばかりなのに、その舌の根も乾かぬうちに、もう殺生か」

「団長」ニゴウは答えた。「兄弟姉妹を殺生しちやあいけないという法がありましたかね？」

「はっはっはっ。ニゴウ、お前の言つことは相変わらず根源的ラディカルじゃないか。そこがお前の良いところだ」

二人の、それが日常、とでもいうかのような言葉のやりとり、滅郎は腰の奥辺りが冷たく固まっていくのを感じた。

するとサンゴウが口をはさんだ。

「団長、ニゴウ、お二人がそんな物騒な話をしているから四方さんが怯えてらつしやるじゃないですか」

不思議なことにそのサンゴウの柔らかない声を聞くと、滅郎の腰のしこりは軽くなり、気分が楽になった。だが、とよつやく回転し始めた頭で滅郎は思った。これも彼らの手の内に違いない。

滅郎の様子を見ながら団長は言った。

「サンゴウ、お前は本当によく気がつくな。お前の気遣い

のおかげで四方さんも少し気分が落ち着いたようだ。これでまたゆっくり話ができるというものだ」

団長の顔に満足の笑みが浮かんだ。

まったくうんざりする、滅郎は思った。どうして俺がこんな茶番に付き合わなきゃならんのだ。そうだ、こんなバカげた奴らと付き合う必要なんて、こっちにはこれっぽっちもないんだ。ただし、こいつらが自分たちの都合で勝手に現れる以上、こいつらの相手をしたくないんなら、まったく不愉快だが、こっちから逃げ出すしかない……。そう考えながら三人の様子を窺っていた滅郎の目が彼らのかぶるつば広の帽子に止まった。すると頭にふつと言葉が浮かび、滅郎は無意識のうちにぼそつと呟いていた。

「ソンプレロ」

「四方さん、この帽子の名をご存じでしたか。その通りです。ソンプレロ！」団長は声を高めて、巻き舌のそれらしい発音で言った。

そして、そのつば広の帽子を右手で取ると胸の前にかざし深々とお辞儀をした。それに続いてニゴウとサンゴウも動作を合わせ帽子を取りお辞儀をした。その芝居があった仕草を見ていると滅郎の中のうんざり感はいや増した。

「四方さん、まったく申し訳ないことです」団長が本当に残念そうな顔をして言った。「われわれとしても、これで精一杯礼儀正しくやっていますつもりなのですが、どうやらわれわれの一挙手一投足が四方さんの神経を逆撫でしてしまふようですなあ」

それが分ってるんなら、とつとと帰ってくれと、滅郎は怒鳴り散らしたい気分だったが、薬で頭も体も重く、とても大声を出す気力は湧いてこなかった。

「ふう、こころで四方さんの毒舌の一つも聞きたいところでしたが、今日の様子ではその願いも叶いそうにありません」団長は肩をすくめて大げさにため息をついた。

「まあしかし、こうやっていつまでも腹の探り合いのよう  
なことをやっても仕方ありません、ねえ？ 四方さ  
んが相手の話だけに、こいつはほんとにシカタないと。  
あっはっはっはっ」

あまりの下らなさに滅郎の頭の中は白くなった。現実  
感が遠のき、夢を見ているような気持ちになっていく。  
「さて四方さん」おもむろにビジネスライクな口調になっ  
て団長は言った。「それで、先日お願いした件ですが、お  
返事のほうはいかなるものでしょうか？」

団長の言葉に現実に戻された滅郎は、体を起こし  
ベッドの上にあぐらをかいて座った。まだ体には十分な  
力が入らなかつたが、力強い声できっぱりと言った。

「この間も言ったはずだ。断る」

「ほう、そうですか。それは残念至極です」

団長が言うと、サンゴウが口をはさんだ。

「団長は、残念さに断腸の想い、ですね」

「おつ、今日はサンゴウか、なかなかつまいじゃないか。

団長は断腸の想い、か。うわっはっはっはっはっはっ」

滅郎はまた意識が遠のくのを感じた。

「いやいや、しかし」笑いが収まると滅郎の様子には構  
わず団長は続けた。「四方さんのその意志の固さには大変  
敬服いたしますよ」

団長は感心感心というように頷いて見せると更に言葉  
を続けた。

「それでは二つめをお願いといきましょう」

団長がニゴウとサンゴウに目で合図を送る。そして再  
び奇天烈な演奏が始まった。

「あー、あなたにーお願いがー、あるのよっ」

「あるのよっ」

「あー、どうかお願いかなえてー、くださいっ」

「くださいっ」

ラテンのような、演歌のような、しかも音程もリズム

もめちゃくちなイカレポンチの音楽だ。それを聴くと滅郎の思考は、またどこか別の世界に彷徨い始めた。

つまり一体このどこに真面目に考えるべきことがあるっていうんだ？ このおかしい三人組はとにかく俺の精神状態を脅かしている。だが実際問題のところは、夜のうちに俺の部屋に勝手にやってきては少しばかり騒いで帰っていくという、ただそれだけのことじゃないか。確かに二ゴウとかいうやつはかなり危ない感じがするが、三人全体として見てみれば、それほど危険があるとも思えない。こつちが気にしすぎるからいけないんであって、こんなことは大したことないんだと開き直ってしまえば、案外どうってことないって話になるはずだ。もちろん、そのどつてことないというふうに受け止めきれないところが問題なんだが、とりあえず眠剤はもらったわけだし、今を乗り切れば、なんとか毎日を回していくこともできそうじゃないか……。

そんなことを考えていた滅郎の意識がようやく部屋の中に戻ってくると、イカレた演奏はいつの間にか止み、その場は静寂に包まれていた。滅郎が団長に視線を向けると、団長は口を開いた。

「四方さん、大変結構です。われわれの演奏をものともせず、あるいはひよつとすると、われわれの演奏を乗り物として、そうやって自分の世界に入っていくことができるとは、これはまったく希有な才能です」

自分の行動が始終観察されていて、しかもそれが一々団長の評価の目にさらされているという状況に滅郎は虫酸が走った。

「そこです、四方さん。二つめのお願いです、あなたのその才能をわれわれに貸していただきたいのです」

団長は思わせぶりに間を取った。滅郎はなんのことを言っているのかといぶかしく思いながら続きを待った。団長は芝居がかった動作で手のひらを使って滅郎を指すと

言った。

「あなたの、セキュリティギークとしての才能です」

その言葉を聞くと滅郎の頭の中は静まりかえり、耳にはキーンという生理音が響き渡った。体中の全ての細胞が活性化するような不思議なエネルギーの流れを滅郎は感じたが、それがどこからくるものなのかは、滅郎にも分らなかった。

滅郎の目は団長の胸の辺りを見ていたが、その右にいるニゴウと左側のサンゴウが視界の中に妙にくつきりと写っている。それだけではなく、視界に入る限りの自分の部屋全体が異様なまでの明瞭さで頭の中に像を結び、それでいて自分が何かを見ているという意識が滅郎にはないのだった。

「ギークと聞いて、ギイクツとしましたかね？ ふっふっふっふっふっふっ」

団長のその耳障りな含み笑いを聞いて、滅郎は少し現実じに引き戻された。

「四方さん」団長は言葉を続けた。「あなたの表の顔は会社勤めの平凡なソフトウェアエンジニアです。むしろ平凡とはいえ有能なわけですがね。ところがその裏に隠している、闇のセキュリティギークとしての顔も、われわれはよく存じ上げているわけです」

滅郎はぼんやり視線を部屋の中に漂わせたまま団長の言葉を聞いていた。子守歌でも聴いているかのように滅郎の心は静まりかえっていた。

「インターネットの裏の世界で知らぬものはいない tAmEd-  
ブル、その世界ではむしろミスター t b として知られておるわけですが、その人物が現実の世界では一体何物なのか。これ突き止めるにはわれわれの力をもつても誠に苦労しました。」

そこで団長は言葉を切ってサンゴウの方に顔を向ける

と言った。

「そうだな、サンゴウ?」

サンゴウは恭しく頷くと言葉を引き継いだ。

「まったく今回の調査は難航を極めました。けれど我が教団の辞書に不可能の文字はありません。現にこうしてわれわれは四方さんの目の前に存在するわけですから」

サンゴウは嬉しそうな表情を浮かべ柔らかに滅郎に微笑みかけた。滅郎はゆっくりと頭を左右に振った。

「さあ、四方さん。いや、もう、ミスターerbと呼ばせてもらった方がよいでしょうな」団長が言った。「われわれは是非ともあなたの能力を我が教団のために役立ててほしいのです。あなたの才能とわれわれの力を合わせれば、世界征服は無理としましても、この悪徳うずまく現代社会の中に正義の一大勢力を築きあげること、これは容易いことです。ミスターerb、さあ、われわれと一緒に夢に向かって進みましょう!」

滅郎は唇を舌で舐め湿らせてからゆっくりと言った。

「どつともよく分らん……。何か勘違いしてるんじゃないのか? 俺は確かにソフトウェアエンジニアだし、自分で言うのもなんだがそれなりの才能もあるつもりだ。そして俺が軍事関連のプロジェクトを扱っているのも事実だ。そこまではお宅らの調べたとおりだし、何度も言っているとおおり、その件でお宅らに協力するつもりはない。だが、そのギークがどうしたとかミスターなんとかが、そいつはいったい何の冗談なんだ? 俺には見当もつかんな」

「はっはっはっ、そうきましたか」団長は予想していた通りの冗談の落ちを聞いた、とでもいうように高らかに笑った。「ではまあ、四方さん、とりあえず今しばらくはそう呼ぶことにいたします。しかし、四方さん、どちらが冗談を言っているかといえば、これはあなたのほうとということになります。まあ、いいでしょう。なかなか



面白い冗談ですし、しばらくはそれに付き合つことにして、四方さんは有能だがごく普通のソフトウェアエンジニア、そういうことにしておきましょう」

「団長」ニゴウが口を開いた。「まだるっこしいことはこのくらいにしとけませんか。この野郎、平気で知らばっくれやがって、一発シメなきや話が進みませぬせ」

ニゴウはそこまで言つと、両手の指を組み合わせてから反り返らせた。関節が派手な音を立ててほきほきと鳴った。

「ニゴウ、お前の気の早さは相変わらずだな。いいか、われわれの交渉はあくまでも紳士的なものでなければならぬ。そのことはお前にもとつに分っているだろう」

「お言葉ですが、団長、その紳士的な交渉とやらも結局は決裂しちまつて、最後には力がものをいうことになる。大抵そうじゃありませんか」

「はっはっはっ、お前は本当に正直にものを言うなあ。お前の言うことも確かにもつともだが、なにしろ今回の交渉相手は四方さんだ。この方には是非ともご自分の自由意志で、みずから率先して、われわれの一員になつてもらわなければならぬ。そうでなければ、彼の能力を十全に發揮してもらつことができんからな。そういうわけだ、ニゴウ、お前の出番はあるにしてもまだまだ当分先だ。今はまず、サンゴウ、ミスター・b についての調査結果を四方さんに説明して差し上げるんだ」

「かしこまりました」そう言つとサンゴウは、足下に置いてあつたスーツケースの中から折りたたみ式のアルミのテーブルを取り出して広げ、更に小型のコンピュータとプロジェクトタを取り出すとその上に置いて配線した。その間ニゴウはスクリーンを設置していた。滅郎は感情の麻痺した冷たい視線でその光景をぼんやり見ていた。

準備が終わり、プロジェクトタに投影されたのはこんな文字だった。

tAnnEdblUE  
(mr. tb)  
報告書

画面の左下にはカードにあったのと同じ、赤い蓼の花に見えなくもないマークが映っている。

サンゴウはコンピュータを操作して画面を切り替えながら説明を始めた。画面には英語の新聞や日本の新聞が世界規模のネットワークダウンを報じる映像が映っている。

「四方さんもご存知とは思いますが、ミスターtbは世界的にその名を知られたセキュリティギークです。二年前の九月十一日、ペンタゴンを始め、アメリカの様々な軍事関連のネットワークシステムが同時に攻撃を受け、数時間程度ではありましたが世界中のインターネットが混乱に陥るといふ事件が発生しました」

滅郎も tAnnEdblUE という名前には聞き覚えがあったし、仕事柄その事件についてもおおまかには知ってはいた。「この事件は、発生した日付からアラブ系のネットワークテロではないかと取り沙汰されましたが」サンゴウは画面を切り替えながら話を続けた。「FBIの捜査により、事件を起こした実行犯はアメリカ国籍の少年たちが構成するハッカーギャング団であることが判明し、事件の後しばらくして全員が逮捕され現在裁判が進行中です。そして、彼らがこの事件に使ったソフトウェアの作成者が

tAnnEdblUE ことミスターtbだったわけですよ」

そこで団長が口をはさんだ。

「それだ、tbna<sup>ティーパーナック</sup>cとか言ったな。素晴らしいソフトだ。そうだろう、サンゴウ?」

「団長、世界最高のソフトと言ってもいいでしょう」「サンゴウが答えて言った。」「tbna<sup>ティーパーナック</sup>cすなわち、ツイスティング&ブラスティング・ネットワーク・アドミツション・コントロール、ふー、長い名前だ、私でも舌を噛みそうになります、簡単に言えばネットワークのセキュリティシステムをねじ切って入り込み、内部から噴き飛ばすソフト、そういうことになりましょうか」

「よし、いいぞ、どんだんぶっ飛ばしてやれ」団長が浮かれて言った。

「団長、落ち着いてください。そうそうぶっ飛ばすわけにはいかないのです」

「ん、まあ、それはそうだな」団長は居住まいを正して言った。

「さて」サンゴウは続けた。「ミスターtbは、ネットワーク・セキュリティの脆弱性を世間に明らかにするためにこのようなソフトを作ったわけでして、彼自身は悪質なハッカーではない、正確な言い方をすれば、彼は決してクラッカーというわけではないのです。しかし、彼は自分が世に問うたソフトウェアの危険性をよく分っておりますから、ご自分はセキュリティギークのAnnEdBITEという仮面をかぶって、その正体が社会の目には決して触れないように大変慎重に行動しておられる、そのような次第です」

そこまで聞いて滅郎は口を開いた。

「tbの話は分ったし、お宅らが何を企んでいるかも大体見当がついた。しかし、もう一度言うが俺はtbなんてやつは知らん。それにだ、仮に俺がtbだったとして、どうしてクラッカーでもないtbがお宅らに協力するわけがあるんだ? 全然話の筋が通らないじゃないか」

「それはどうでしょうなあ、四方さん」団長が不敵な笑

みを浮かべて言った。「われわれはこう見えても、人間心理のプロフェッショナルを自認しております。そのことは、今までお付き合いいただいて、四方さんにもある程度ご理解いただけていると思いますが」

団長は重く腹に響く声色でそう言うところ言葉を止め、滅郎のどの仏の辺りをじっと見つめた。滅郎のどのに何かがつつかえるのを感じ、軽い目眩を覚えた。一体こいつらは……。滅郎の両腕に鳥肌が立った。

団長はそんな滅郎の様子には構わず、平然と言葉を続けた。

「この先はわたしのほうから説明いたしましょう。われわれが今回ミスターtbにお願したのは、我が教団でマインドスナッチャーと呼んでいるソフトウェアの開発なのです。まずミスターtbには、すでに対策がなされてしまったtbnaacを超える新たなネットワーク侵入ソフトを作っていたできます。絶対見つからないように侵入し、誰にも気づかれないことネットワークの中で活動するマインドスナッチャーにとって、肝心要の部分です。そしてこのソフトは獅子身中の虫のごとく、活動を続け、いずれそのネットワークを使っている組織自体を壊滅へと導くのです」

バカな……。滅郎は耳を疑った。ネットワークをダウンさせるのではなく、組織を滅ぼすだと？ どうしてそんなことができるっていうんだ？ こいつらはやはり頭がおかしいに違いない……。

「四方さん、われわれがSFのような絵空事を話しているとお考えですね」団長がまたあの重く響く声色を使い、滅郎の考えを読んだかのように言った。

その言葉を聞いて、滅郎は顔から血が引くのを感じた。あぐらを組みその右の腿の上に置いている右手が軽く震えた。

「ですが、四方さん、これは冗談でもなんでもありません

ん。もつ少し説明いたしましょう。マインドスナッチ、すなわち精神的な乗っ取りということですが、この原理は至つて簡単です。ネットワークに入り込んだ虫は、そこで誰にも気づかれることなく密かに活動します。この虫は適当な一台のコンピュータに寄生して時折り重要な情報を、偽装して誰にも分らないように送信したり、あれこれのつまらないファイルを消去したりします。コンピュータの設定がちょっとだけ変わっているなんていうのもいいでしょう。「団長が微笑みながら話している間、サングウはスクリーンにもっともらしいプレゼンテーションの映像を切り替えながら流している。滅郎はほんやりと、このプレゼンは誰に向けて作られたものなのだろう」と考えた。

「そのコンピュータの持ち主は初めは何も気がつかなくても」「団長は話を続けた。「そのうち誰かがこっそり自分のコンピュータに触ったのではないかと感じたり、何物かがネットワークから侵入しているのではないかと疑いを持つたりするでしょう。ですが、それが一体何物の作業なのかは分かりません。そしてこのソフトはそれ以上のことは何もしません。というより、持ち主が気づいたか気づかないかのところでそのコンピュータでの仕事は終えるわけです。そして、対象のコンピュータを変えて、また同じ仕事をする。やがてそのネットワークを使っている組織には不安が生じ疑心暗鬼が生まれ、組織としての能力が蝕まれていく……。そしてそのためには、絶対誰にも見つかからない完璧な侵入のための技術が必要と、そういうわけなのです。お分りいただけましたかな。ふっふっふっふっふ」

団長の含み笑いを聞いて、滅郎は体から力が抜けていくのを感じた。

滅郎は考えた。絶対誰にも見つかからない完璧な侵入などということはあり得ないし、こいつらの言つようにそ

んなにことがうまく具合に運ぶとも思えない。だがしかし、これは技術的には可能な話だ。こいつらならやりかねない……。

「四方さん」団長が続けて言った。「情報戦というものは実に地味なものです。映画のジェームズ・ボンドのような派手な場面は滅多にあるもんじゃない。それと同様、ネットワークに潜入するということに関しても、われわれのように世界を変えろという大きな夢を持って実行する場合には、そこらの小僧っ子クラッカーたちがやっているような、ただ派手なだけの腕比べでは話にならないわけです。地道に、着実に、相手を機能不全に追い込む。それと同時に使えそうな情報もいただく。これがわれわれの今回の計画です」

滅郎は緊張に耐えかね、体を揺すって心を落ち着けよつとした。

「さて」「しばらく沈黙が続いたあと団長が口を開いた。「今日もずいぶん長い間お邪魔してしまいました。四方さんは明日もお仕事だ。われわれはこの辺で失礼いたします」

団長がそう言つと、いつものようにニゴウとサンゴウは手際よく道具を片付け、三人はまた風のように去つていった。

翌日も滅郎は普段通り会社に行った。

彼らが去つたあと、眠剤を飲んで寝過ぎてもまずいと思ひ、泡盛をあおつて横になつたが、ほとんど眠ることができなかつた。それでもなんとか会社に行くと、眠気を振り払いながら午前中の業務をこなした。

昼少し前に仕事が一段落つくと、早いが休憩を取る、何かあったら屋上にいるから連絡をくれ、とプロジェクトのメンバーに言い残して、階段で屋上に上がった。オフィスのある四階から屋上まで三階分の階段は、寝不足

の体にはきつかったが、頭をすっきりさせるのには役に立った。

屋上の端まで歩き金網に左手をかけると、滅郎は煙草を吸った。頭を空っぽにして下界を見下ろす。コンクリートのビルが建ち並ぶ、なんの変哲もない街並みだ。九月の日射しがまだ暑かったが、滅郎にはその暑さこそ生きている実感であるかのように感じられた。遠く線路の上を銀色の列車が滑るように走り、駅に入っていくのが見える。その模型のような小ささに滅郎はなぜか哀しみを覚えた。

背後にばたばたいう足音を感じて振り向くと、スズキが全身から興奮を発しながら近づいてくるのが見えた。

だが、滅郎の目はスズキの後ろ、階段室の周りに植えられた何本かの木々に吸い寄せられた。そのうちの一本はサルスベリで、白にも近い淡いピンクの花をつけている。もう盛りを過ぎた夏の終わりの寂しげな花だった。

「滅郎、大ニユースだ！」スズキが大きな声で言った。

滅郎は無表情にスズキの顔を見た。

「メビウス・リング、本当に売れたぞっ!!」スズキは喜びに打ち震えながらそう叫んだ。

メビウスか、と滅郎は思った。スズキは興奮しながら話しを続けたが、滅郎の頭にはその言葉は入ってこなかった。

メビウス・リングという言葉が、滅郎の頭に今の自分の状況を浮かび上がらせた。気の進まない軍事関連の仕事をしている自分、生子との関係をこれからどうしていけばいいのか迷っている自分、そしてあいつらの誘いに乗るわけがないと考えながらも、彼らと一緒にやっている光景をどうしてか想像してしまう自分……。

滅郎は、これから自分が選択を迫られることになる状況を、善と悪という言葉で捉えてみようとした。

つまるところ、善とか悪とかいうものはメビウスの輪の表裏のようなものなのだ。表だと思って見ているとこ

るをずっと辿っていくと、いつの間にかそこが裏になっていることに気づく。そのときそこは確かに裏なのだが、更にそれを辿っていくと、またいつの間にか表に戻っている。

善と悪も結局はそれと同じだ。ある立場から見れば正しいと思える行動を取っているとき、そこからつながっている様々なものを辿って行動を続けていくと、どこでも間違つてなどないはずなのに、ふと気がつく間違っているとしたか言いようのない立場に立っている自分を見いだす。そこでそのことに動揺したりせず、冷静にたがりを辿って行動を続けていけば、再び正しいと思える場所に戻っていくことができる。

しかし、と滅郎は思った。俺はどうもそういう曖昧なあり方は苦手だ。なんとかしてその状況を断ち切ることはできないのか。難しいにしてもそれを断ち切る方法がどこかにないものなのか。そして、もし断ち切ることができたとして、そのとき果たしてどちらが表になり、どちらが裏になるのか。いや、自分はどちらを表として、どちらを裏とするのか。

そう考えてはみたものの、滅郎には、自分が本当に何かを断ち切りたいと思っているのかどうか、そのところがどうにもはっきりしなかった。

滅郎は自分のこれからを思い描こうとした。やつらはこの先どんな手で俺を落とそうとしてくるのか。俺はそれにどこまで抵抗できるのか、果たしてきちんと日常の世界に留まることができるのか。あるいはこの日常を生きていくことができるとして、俺にスズキの言うような世間並みの暮らしをすることができるのか、それとも一体、俺はどんな道を歩むことになるのか。

予測のつかない明日を思い、自分の体の奥底に迷いとも恐れともつかない感情がうごめくのを感じながら、滅郎はスズキの肩越しにサルスベリの花が淡く風に揺れる



のをぼんやりと見ていた。

(了)